

「佐渡御書」講義

文永九年三月 五十一歳御作
与弟子檀那

(御書全集 九五六ノ、九六一ノ)
編年体御書四七一ノ、四七六ノ)

大難の時こそ強盛な信心を

この御書は、日蓮大聖人が、もっとも大きい難を受けられ、佐渡の国へ流されたときに、弟子檀那に与えられた御書です。したがって「佐渡御書」と申し上げます。

このとき、多数の弟子檀那が退転しました。そこで、大聖人が「退転なんかしてはいけない、いまこそ強盛な信心をする時ではないか」と、強く指導された御文です。

当時、流罪というのは死罪につぐ重い刑罰で、食べ物もあまり与えられず、大聖人は、ときには雪を食^ゆしあがって、飢^うえをしのがれていました。そういうひどい待遇だったのです。

師匠がそのような大難にあっていますから、当然、弟子檀那のなかには、臆病^{おくびょう}になり、退転した人もいたでしょう。

日蓮大聖人は「こういう難にあった時こそ退転してはいけない。いま信心しきっていけば、成仏は

疑いない、といわれています。それが、この御書の元意です。

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵塔たうのつじ十郎入道殿等辻さじきの尼御前塔いちいちに見させ給べき人人の御中おんちゆうへなり、京鎌倉に軍いくさに死しる人人を書付かきつけてたび候へ、外典抄文句もんぐの二玄げんの四の本ほん末勘文宣旨等まつかんもんせんじこれへの人人持もちてわたらせ給へ

「此文」すなわち「佐渡御書」は、富木常忍、そしてまた三郎左衛門（四条金吾）等のお弟子の方々に与えられたものです。

富木常忍も四条金吾も、大聖人のおんもとで、もっとも活躍した大信者です。それから「大蔵たうのつじ十郎入道」——この人はあまり御書にでていませんが、このように、大聖人が大迫害を受けられたときに、名前をおしたためくださった人でありますから、やはり強信な人であったと考えられます。

「一一」に見させ給べき人人の御中へなり——ここは、一人ひとり、多くの弟子に、この御書を見せてあげなさい。そして信心を奮起ふんきさせなさい。この御書は、弟子檀那全員に与えるのだということですよ。

「京鎌倉に軍に死る人人」——この御書は、文永九年三月のものです。この年の二月には、京都と

鎌倉で、北条一門の争い、すなわち自界叛逆難があつて、そうとうの人が死にました。そのときに、やはり、日蓮大聖人の弟子、信者のなかの武士で、亡くなつた人もいるであろう。その人たちの名前を、みんな書いてよこしなさい。ぜんぶ追善供養してあげますよ、という大聖人の大慈悲です。

大聖人御自身が、ほんとうは佐渡の国でたいへんな御難儀をしていらつしやる。しかし、そのことより、亡くなつた人々のことを思われて、追善供養してあげますよ、拔苦与樂の供養をしてあげますよ、とおおせになつてゐるのです。

この一文をみても、大聖人が仏さままでいらつしやる——御本仏の大確信でいらつしやるということ、よくわかるわけです。

そして「外典抄」また「法華文句」「法華玄義」あるいは勘文、宣旨等の資料も、こちらへ来る人に託して持つてきてもらいたいといわれています。

日蓮大聖人が、どれほど勉強なされていたかということがわかるでしょう。また、大聖人は根本をぜんぶ知つていらつしやいます。しかし、さらにこのように、参考として、本を持つていらつしやいとおっしゃつてゐるのです。

世間に人の恐るる者は火炎の中と刀劍の影と此身の死するとなるべし牛馬猶身を惜む況や人身をや癩人猶命を惜む何に況や壯人をや、仏説て云く「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも

手の小指を以て仏經に供養せんには如かず」取意、雪山童子せつせんどうじの身をなげし樂法梵志ぎやうぼうぼんじが身の皮をはぎし身命に過すたる惜おしき者のなければ是を布施ふせとして仏法を習へば必かならず仏となる身命を捨する人。他の宝を仏法に惜おしむべしや、又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨すべきや、世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははちちに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすほむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすほむしかれども魚魚にばかされて釣つをのむ鳥は木にすむ木のひ低き事をおじて木の上枝にすむしかれども魚にばかされて網にかかる、人も又是かくの如し世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし

「世間に人の恐るる者は」——人が「恐ろしい」ということに二つある。

一つは「火炎ほのほの中と刀劍つるぎの影」——これは今でいえば戦争です。原爆も、水爆も入ります。大聖人のこの一節をみても、戦争反対です。戦争はみんな恐ろしいのです。この戦争を防ぐのが仏法です。正法です。

また「此身このみの死するとなるべし」——この生命が死ぬということも恐ろしい。その生命の問題を解明し、解決するのが、大聖人の仏法です。

したがって、絶対平和主義と、生命の根本的な救済、これが三大秘法の仏法なのであります。牛や馬でもなお命を惜しむ、いわんや人身においてをや、重病人でもなお命を惜しむ、生あるもの

は死にたくはないのです。たくさん病人がいますが、どんな病人でも、少しでも長生きしようと努力しています。死にたくない証拠です。

「何に況や壯人をや」——まして健康な人が、死をこわがるのは当然です。

仏が薬王品に説いていうのには「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも」——これは、金銀等の最高の七つの宝をもって、三千大千世界に布き満たして仏に供養するということであり、それよりも「手の小指を以て仏経に供養せんには如かず」——自分自身の体をいためて、仏に供養するほうが、この場合には小指を例にあげられていますが、もっと偉大なる供養になるのだということです。

三千年も昔に、ここまで経文に説かれているということは、ひじょうに革命的なことです。インドは、今日においてもそうですが、当時はいまよりもはるかに貧富の差がはげしかったのです。金持ちといったらたいへんな金持ちだった。その金持ちよりも、ほんとうに自分の体を使って仏に仕える、また、仏法のために活躍するという庶民の人々を、大きく宣揚しているのです。

なかんずく、大聖人の仏法は庶民のための仏法であり、それであって、また全体に通ずる仏法なのです。ぜんぶ、広く救っていける仏法です。

「雪山童子」は身をなげうって仏法を求めた。「樂法梵志」という人は、身の皮をはいで、それに經文を書きとめ、仏法を習おうと思った。そのようにして、みな仏になっている。

「身命に過たる惜き者のなければ是を布施として仏法を習へば必仏となる」

ということとは、当時は、このような布施をして仏法を習わなければならなかった。したがって、そ

の身をなげうって、身命を捨てて仏法を習った人が、みな仏になったのです。

今の時代は、その必要はありません。今の時代は、御本尊に題目をあげて、大聖人の仏法を人に知らしめていく折伏によって、大功德を得られるのです。昔は小乗教ですから、そのような修行をしなければならなかった。大聖人の仏法は、大乘のなかの大乘で、根本的に違うわけです。

しかし、原理は同じです。信心という心がけ、求道心は同じでなくてはいけないのです。

「身命を捨る人・他の宝を仏法に惜べしや」——身命を捨てて、随力弘通をしようという人が、他の宝を惜しんだらおかしいではないか。

「又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨てべきや」——仏法のために宝を惜しむような、ケチくさい人間が、広宣流布のために、どうしても大事な命を捨てるであろうか。したがって、仏になれるわけがない。「世間の法にも」——一般社会の法は世間法、仏法は出世間法といえます。一般世間、社会の法のうえからみても、重恩をば命を捨て報じているではないか。世間のことでも、重恩を感じて命を捨てた例は、歴史をみればたくさんあります。

「又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し」

忠臣蔵で有名な大石内蔵助をはじめ四十七士は、主君のために命を捨てております。西洋でも、東洋でも、日本でも、このような例はたいへん多い。しかし大聖人は、そのような必要はないとおっしゃるのです。主君のためなどに捨てる必要はない。あくまでも、御本尊に題目をあげて生ききって、御本尊に題目をあげながら死んでいきなさいといわれています。これだけでよいのです。

「男子ははぢに命をすて」——今はそんな恥で命を捨てる人などはいませんが、男というものは見栄や体裁ていさいを重んずるものです。

「女人は男の為に命をすつ」——これは氣をつけなさいよ。これは今でも多いのです。男のために命を捨てたりしたら損してしまいます。御本尊以外に、信じて絶対にまちがいのないものはないのです。

「魚は命を惜む故に池にすむに……」——ここは、命ほど大事なものは無いということです。生命の尊厳を明かしていらっしやるのです。色心不二しきしんふにの法理は、一貫して生命の尊さを説いています。

新興宗教はみな、生命力を奪う宗教です。人々を奴隷どれいにします。小乗教等は、厳しい戒律などによって、人々の主体性、個性を殺していく宗教です。日蓮大聖人の仏法は、人々の生命力、智慧ちゑを最高に発揮させていく宗教です。根本的に違います。

真言宗は、どうしても長男、一家の柱が倒れていく。残るのは女の人ばかりです。父親がいなくなってしまう。豊臣秀吉も、やはり真言宗です。だから長男がだめになってしまったのです。それから念仏は「念仏無間地獄」のとおりです。また神道しんとうの場合には精神障害者が多い。戦争中は神道が日本を支配しました。その代表的立場にいたのが大川周明おおかわしゅうめいで、やはり精神障害者です。

結局、ほんとうの生命の確立、幸福、それを説いていらっしやるのは、大聖人の仏法だけです。

「池の浅き事を歎きて」——魚は、池が浅いとかまってしまいうから、それで池の底の方へ行つて、穴を掘つて、隠れよう隠れようとしているということです。しかし、エサによって釣つられてしまう。

「鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむ」——鳥は木の低いことをこわがって木の上の

ほうに住むけれど、やはりエサにだまされて、網にかかってしまう。

「人も又是^かくの如し世間の浅き事には身命を失へども」——人もまた同じようなものだ。恋愛に失敗して心中してしまったり、夫婦ゲンカ、兄弟ゲンカをして殺してしまったり、それから海や山に遊びに行つて、大事な命を捨ててしまったり、それでは鳥や魚と同じようだというのです。生命の前途がわからないという点では、動物と同じなのです。

一生涯、正しく生きいきと、いな永遠に崩れない幸福への道を、今後歩んでゆくには、この仏法をたもち、鏡とし、ルールとする以外にない、といわれているのです。世間の浅きことに大切な命を捨ててはいけません。

「大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし」

世間の浅いことにはみんな命を捨てているけれども、大事の仏法には命を捨てない。ゆえに仏になる人も少ない。絶対の幸福、色心^{しきしん}ともに幸福に満ちみちた人生を、生ききっていける人は、ほんとうに少ないということです。

摂受・折伏時によるべし

仏法は摂受^{しやうじゆ}・折伏^{しやくふく}時によるべし譬^{たとえ}は世間の文^{ぶん}・武^ぶ二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を

行ず雪山童子・薩埵王子は身を布施とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし

仏法の修行には、時代によって、授受と折伏の二通りがあります。

正法、像法年間までは、釈尊の仏法ですから授受になります。末法の場合には折伏です。「時によるべし」とは、そう立て分けなくてははいけません。釈尊在世、正法、像法年間の時は授受、それから末法は、邪智、謗法の時といって、人々の根性が悪い時です。

その時は、御本尊を根幹として、折伏していかなくてははいけない。なんのканのと非難されるけれども、折伏によって大勢の人が御本尊を知り、救われてきたのです。末法の衆生は、人のいうことをなかなかきかない。生徒が学校の先生のいうことをきかない、そういう時代です。ですから仏法においても、すべて、折伏の精神でいく以外にないのです。

「譬ば世間の文・武二道の如し」

世間、社会においては、戦争の時は「武」です。平時は「文」です。授受、折伏もそのようなものだといふのです。末法のように、思想、宗教が紊乱して国が乱れている時には、闘争の時代ですから、折伏のいき方をする以外にありません。

仏法は、かならず「授受・折伏時によるべし」です。授受ということは、相手が信じているものを

打ち破らないで、やわらかく人の機根にあわせながら教えていこうというやり方です。

釈尊の場合には、法華經を説くまえは「四十余年未顯眞実みけんしんじつ」といって、四十二年間、ほんとうのことをいわないで、衆生の機根を調節しながら説いていきました。これを授受というのです。

しかし、法華經は随自意ずいじいといって、釈尊自身の境界で、そのまま最高の悟りの仏法を説いた。その意味からいえば、これは折伏になるのです、ですから、釈尊の場合においても、授受、折伏が、じつはあったわけです。

けれども、釈尊の仏法と大聖人の仏法を比べると、法華經も爾前經も、ともに釈尊の仏法は、ぜんぶ授受になってしまふのです。ですから、在世、正法、像法二千年までは、いっさいが釈尊の仏法を根底にした仏法ですから、總体的に授受ということになります。そして末法にはいった場合には、大聖人の仏法では、根幹がぜんぶ御本尊になりますから、いっさいの振る舞いが折伏の行動になります。「昔の大聖は」——「大聖」というのは、仏と訳してもよいし、立派な菩薩と訳してもよい。この場合には「大聖」は雪山童子せつせんどうじ、薩埵王子さつた等をさします。しかし、これらは結局、釈尊の過去世の姿ですから、仏になります。

昔の立派な人は、かならず時にしたがって仏法を修行しております。たとえば「雪山童子」、また「薩埵王子」——ともに釈尊が過去世において因位の修行をしていたときの名ですが、この人たちは、身を布施としなければ仏になれない時代であったがゆえに、自分の体を布施としてささげることが菩薩の修行としたのです。

以前、国語の本にも、雪山童子と鬼に姿をかえた帝釈天との対話がありました。あるとき雪山童子が、仏法を求めていると「諸行無常、是生滅法」と、これは涅槃經にある經文なのですが、それだけがどこからか聞こえてきた。後の句を教わりたいと一生懸命探すと、向こうの方に鬼がいる。そしてその鬼が、おまえの肉を食わせてくれれば後の句を教えてあげるといいます。そこで雪山童子が身を投げて、食べてくれというのです。すると鬼がパッと変わって、帝釈と現れた。じつは雪山童子の求道心をためしたというのです。そのことをおおせられているのです。

薩埵王子は、飢えのために子を育てられないでいた虎のために、自分の体を与えたといわれております。いまは肉屋へ行けば肉はたくさんあります。ですから、無理に自分の肉を食べさせる必要はないのです。

また、樂法梵志は、紙がなかったから、自分の皮をはいで經文の紙にしたり、または筆がなかったから骨を筆のかわりにしました。当時は、そういう修行をして仏になったのです。今は、紙はいっぱいあります。ですから、そのような修行は絶対に必要ない。

そのように現代では、当時とは、ぜんぜん修行法が違うのです。ところが、今の邪宗邪義は、ぜんぶ昔の修行法をやっているのです。大聖人の仏法の修行法は、最高に近代的なのです。二十一世紀、三十世紀、五十世紀、いな、末法万年尽未来際までの近代性をふくんだ仏法であり、修行法なのです。

今は、まだそのはしりですから、他の人々にはわからないのです。みな、いままでの釈尊の仏法とか、天台仏法とか、神道とか、キリスト教とか、そういう先入観念で大聖人の仏法をみておりますか

ら、どうしても、正しい判断ができない。だから皆さんが立派に成長して、だんだん理解をさせてもらいたいし、時代が進めば進むほど、科学が進めば進むほど、しだいに仏法に対する理解が深まっています。ですから、少々の批判とか苦難などに負けてはいけません。

破戒・無戒を毀^{そし}り持戒・正法を用^{もち}ん世には諸戒を堅く持^{たも}つべし
儒教・道教を以て釈教を制止せん
日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし、
釈教の中に小乗大乘権經実經・雜^{ぞうらん}乱して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁^{わきま}へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大
小・權実・顯密を強盛に分別すべし

ここは、正法、像法、末法の時にしたがって、正しい修行のあり方を示されております。

「破戒・無戒を毀^{そし}り持戒・正法を用^{もち}ん世には諸戒を堅く持^{たも}つべし」

正法時代の修行は、戒をたもつことです。もともと「破戒」とは戒を破る、「無戒」とは釈尊の戒をたもたないということです。正法時代は、破戒、無戒ではいけなかった。戒をしつかりたもつことが正しい仏道修行でした。

「儒教・道教を以て釈教を制止せん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし」

これは、像法時代の、天台出現以前の、権大乘教が流布した時代です。

儒教とは、中国の孔子の教えです。道教とは、やはり中国古来の外道の教えです。儒教だとか、道教だとか、そういう外道が、釈教すなわち釈尊の説いた仏教を批判して、流布することを止めようとしたときには、道安法師とか、慧遠法師とか、法道三蔵等が、仏教を妨げる王と戦ったごとく、命を捨てて戦わなくてはいけないということです。

その当時の歴史は、資料はいろいろ残っておりますから、将来、諸君が大学へでも行ったならば調べていただきたいし、または慧遠法師とか、法道三蔵の伝記などを読んで研究してください。

「釈教の中に小乗大乘権經実經・雜亂（ぞうらん）して明珠（みやうじゆ）と瓦礫（がりやく）と牛驢（ごろう）の二乳を弁（わきま）へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顯密を強盛（かうじやう）に分別すべし」。

ここは全体として五重の相對から述べられています。

「釈教の中に小乗大乘」——これは大小相對です。このまえのところまでは内外相對です。

それから「権經実經」——これは権実相對です。それが雜亂して、乱れて、明珠——きれいな珠と、瓦礫（がりやく）——かわらのかけらと、また、牛とロバの乳を混同しているように、乱れている時は、天台大師や伝教大師のごとくに、大乘教と小乗教、権教と実教、顯教と密教とをしっかりと判別していきなさい、とのおおせです。

ここで「顯教」とは、だれにでもわかりやすい浅い法門、爾前教をさします。また「密教」とは、仏にしか理解できない甚深の法門、法華經を意味します。

また「道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて」というところは像法の前半です。そしてこの段の「天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし」のところは像法の後半です。この論じ方からいって、つぎには、末法の日蓮大聖人の時代がくるのです。

師子王のごとき信心を

畜生の心は弱きをおとし強きをおそる当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり強敵を伏して始て力士をしる、悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおごれる者は必ず強敵に値ておそる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し、正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし千経・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず

なんといっても「佐渡御書」の前半の肝心要はこの段です。ここさえはつきりしていればよいのです。

「畜生の心は弱きをおどし強きをおそる」

「畜生の心」とは、弱い者に対しては威張り、いじめて、強い者にはへつらうという、いやしい心です。こういう心であってはいけない。たとえ相手がどんなに強かろうと、悪い者に対しては断固、戦わなくてははいけません。

「当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり強敵を伏して始て力士をしる」
はじめ

「当世の学者」とは、大聖人御在世当時の学者、邪宗の僧侶たちです。また現在の学者にもあてはまります。これらの学者等は畜生のような心をもっている。「智者の弱き」——日蓮大聖人が、権力をもたず、お一人であるのをあなどり、権力者の横暴な力をおそれ、へつらっている。「諛臣」というのは、このような者をいうのである。

強敵を倒してこそ、はじめてその力の強いことを知ることができるのである。

「悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」
かたうど

「悪王の正法を破るに」——「王」とは権力者、「悪王」とは悪い権力者のことであり、ここでは北条一門のことをさしています。

「邪法の僧等が方人をなして」——時の権力者が正法を破ろうとしているそのときに、邪法の僧等が方人をなす、仲間になるということです。大聖人御在世当時でいえば、極樂寺良観や建長寺道隆のこと

であり、現在でいえば、全日仏や新宗連がまったくこのとおりでしょう。

「智者を失はん時は」――「智者」とは、日蓮大聖人です。現在でいえば、日蓮大聖人の教えを正しく信奉し実践している日蓮正宗創価学会も、その末流の一分にあたるといってもよいでしょう。そしていま、日蓮正宗そして創価学会を破壊しようとする陰謀が、しばしばあります。しかし、私たちはこの大難を喜ばなくてはならないのです。

なぜならば、このような情勢だからこそ、広宣流布の戦いに、師子王のごとき信心をもって励んでいくならば、その人は、かならずこの御金言どおりの結果になれるからです。

「師子王の如くなる心をもてる者」の「心」とは信心です。たいへんなときほどがんばれば、偉大な功德があるのです。

皆さんの日常生活においても、競争率の激しい試験に勝った場合に、あの人は、なかなかがんばったな、頭がいいな、と思うでしょう。競争が激しければ激しいほど、勝利の価値は大きいのです。これはオリンピックにしても、野球の試合にしても、世間の事象のすべてに通ずることです。仏法は道理ですから、その道理は同じなのです。

また「師子王の如くなる心」とは、私たちの信心に約していえば、あくまでも、困難にぶつかった場合に、御本尊を中心に題目を唱えて唱えて唱えぬいていく者という意味になります。個人においても、学会においても、広宣流布においても、結論はそこへきます。

しかし、題目を唱えるというだけのことなら、だれでもできます。ほんとうの師子王の心とは、あ

くまでも広宣流布を実現するという一念、戦いの信心がなくてははいけない。受け身でなく、積極的でなくてはならない。『よし、やるぞー みんな退転しても、自分はやるぞー 断じて広宣流布するぞ、大聖人の教えを最後までいいきるぞー』と、その決意がなくてははいけません。

受け身の題目と、積極性の題目と、それは違います。積極性が師子王です。建設です。

戸田第二代会長は牢へ入られました。しかし『断じて広宣流布する、負けてなるものか』と決意され、題目をあげられたのです。それが師子王の心です。

建設的、積極的な強さ、同志を守ってみせる、広宣流布を勝ち取ってみせる、一人立ってみせるぞという、その強さがなくてははいけません。しかし、われわれはみな凡夫で、一人ひとりは弱いものです。だからこそ団結していきましょう。団結は力です。互いに励ましあっていくのです。また、人を励ましていけるような自分になっていくのです。

大聖人は御本仏だから、お一人で世界を変え、宇宙を動かされました。われわれは、そうはいきませんから、多数の人間が団結して、一つの目的に向かって、広宣流布を願って、題目を唱えていけば、大聖人御在世当時と同じように、世界をも変えていきます。今は民主主義の時代ですから、民衆が起ち上がる時です。その民衆の題目によって、大聖人の所作と同じようにさせてくださるのです。

「例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべし」

すなわち、大聖人こそ「師子王の如くなる心」をもって戦ってきた、もっともよい例である。これは、おごっているのではない、慢心しているのでもない。すなわち正法を惜しむ心が強く、民衆を救

おうという心が強いから、このように実践してきたのである。

私たちもまた、「正法を惜む心」が強盛でなくてはいけません。その人には仏界が湧現します。御本尊を大事にしよう、総本山を大事にしよう、仏法を守ろう、この心が大事なのです。そこから情熱ができる。丈夫の心が、脈々とでてくるのです。利己主義ではできません。

「おごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し」

慢心している者は、かならず自分より強いものにあうと、恐れる心がでるものである。たとえば、おごりたかぶって大きくなっていった修羅が、帝釈に責められて、無熱池の蓮のなかに小さくなって隠れてしまったようなものだ、とのおおせです。

「正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし」

「正法」とは日蓮大聖人の仏法です。具体的にいえば大聖人の御書が正法の一字、一句になります。これが末法の正法であり、成仏できる法です。他の經、釈、論ではだめなのです。

「千經・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず」

あらゆる哲学、あらゆる經典等を学んだとしても、時機に相違すれば、つまり現在においては、日蓮正宗の御本尊を根本としないかぎり、絶対に成仏することはできません。いくら東大でインド哲学をマスターして博士になったとしても、絶対的幸福境涯は得られない。

私たちは、日蓮正宗に入信できてほんとうによかったのです。そのことは、あとになって、皆さん

が、いろいろな時代を生き、人生の複雑性を知り、さまざまな体験を積んできて、初めてわかってきます。ですから御本尊だけはきちんと持^{たも}っていないさい。あとで振り返ってみて、大勢の人々をみていけばわかります。

「立正安国論」の予言的中

宝治の合戦^{かつせん}すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子^{しし}身中の虫の師子^{しんちゅう}を食^はむ等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親^{した}しみより破るべし、薬師経に云く「自界叛逆難^{じかいはんぎやくなん}」と是^{これ}なり、仁王経に云く「聖人去る時七難必ず起らん」云云、金光明経^{こんこうみょう}に云く「三十三天各瞋恨^{しんこん}を生ずるは其^その国王悪^{はしい}を縦^まにし治せざるに由^よる」等云云

ここでは、自界叛逆難をはじめとする七難が起こっているのは、立正安国論の予言どおり、正法を用いない罰であり、日蓮大聖人を佐渡へ流した罪によるのであることを示されています。

「宝治の合戦」とは、宝治元年に、三浦一族が北条一族に対して謀叛^{むはん}を起こして滅亡した有名な合戦です。鎌倉幕府の内乱です。それから二十六年たって文永九年二月に、また内乱、自界叛逆難が起き

た。すなわち、北条時宗ときむねの兄時輔ときすけが、弟の時宗に執権職しつけんをとられたことを恨み、京都と鎌倉とで同時に叛亂を起こそうとして失敗し、殺された事件です。

「外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食等云云」

外道、悪人は、如来の正法を破ることが絶対にできない。もし仏法が破れるとしたら、それは内部の者が破るのです。師子はどんな敵にも負けないが、自分の身中に発生した害虫には弱いのです。

皆さんも、創価学会を護る大事な役目があるのです。最後まで団結していただきたいと思います。現在のことは、すべて最後は皆さんに、いっさいを任せていくための礎石そせきなのです。ですから、みんな尊敬しあって、ガッチリ団結して、一人も師子身中の虫、悪人を内部からは発生させないぞ、という確信をもって進んでいただきたいと思います。それを覚えておかなくてははいけません。

自分が師子身中の虫になってもいけない。また、師子身中の虫をわかしでもいけない。内部が大事なのです。これは私の決意です。それは、また代々の会長の精神でもあるのです。みんなで結束するのです。

会長は一人です。これは仕方がない。何人もいたら派閥になってしまいます。あとは皆さんが、御本尊を根幹にして、立派に成長し、そして世界の広宣流布を成し遂げようという異体同心の心で、お互いに尊敬しあい、信頼しあって進んでいただきたいと思います。

「大果報の人をば他の敵やぶりがたし親したしみより破るべし」

「大果報の人」とは、ここでは北条時宗のことをいわれていますが、もっとも大きい大果報の人は、大御本尊を持った人です。大御本尊を持った人は他人には破られない。しかし内部からは、怨嫉や反感で破られてしまうのです。そのことは、十分気をつけていきなさいとおっしゃっているのです。

いままでは創価学会には、そんなことはありませんでした。だが、これから将来が問題である。というのは、みんな社会的に偉くなってしまふ。そして、だんだんと信心を忘れてきて、我見がでてき、怨嫉が始まるのです。そのときに、それを食い止め、信心の伝統を護っていくのがあなた方です。

「薬師経に云く『自界叛逆難』と是なり、仁王経に云く『聖人去る時七難必ず起らん』云云、金光明経に云く『三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦にし治せざるに由る』等云云」

薬師経に「自界叛逆難」と書いてあるではないか。このたびの北条一門の内乱は、幕府が、大聖人を島流しにしたから起こったのである。立正安国論の予言とおりです。それをわが弟子檀那はわかっていきなさい、とおっしゃっているのです。

日蓮大聖人は、御年三十九歳のとき、立正安国論で、すでに、七難のうち五つの難が起きている。このまま北条幕府が正法を護持しないならば、さらに自界叛逆難、他国侵逼難が、かならず起こってくる」と予言されていました。その自界叛逆難が、ここでまず的中したのです。

それからこのつぎに、他国侵逼難として、元寇の難があらわれてきます。すべて大聖人のおおせどおりです。

ところで、七百年過ぎた今日においては、その七難の起こる順序が逆次になっています。すなわち

他国侵逼難の太平洋戦争から始まったのです。今は自界叛逆難に移っています。日本じゅう、世界じゅうが自界叛逆難です。それから物価が上がるとか、七難がだんだんと現れてきている。疫病、これも七難のなかほどにでてきます。

仁王經のなかの「聖人」とは、日蓮大聖人のことです。大聖人が去る時とは、佐渡へ流された時です。鎌倉にいらっしゃればまだよかったのに流されたから、七難が厳然と起こってきた。

またじつをいえば、他国侵逼難も当時すでに起こっている。それは元の使いがすでに来ていて、その兆^{きざし}がありました。

それから最後に「金光明^{こんこうみょう}經に云く『三十三天……』——これは天上界を三十三天に分けてあるわけです。ぜんぶの天上界が怒りをなす。瞋^{しん}恨^{こん}を生ずる。それは、国王が邪宗邪義をほしいままに流布させて、正法をおさえるから、三十三天が怒りをなして、自界叛逆難も起こるし、他国侵逼難もある。三災七難が競い起こるとの予言書です。

大聖人は全世界の棟梁

日蓮は聖人にあらざれども法華經を説の如く受持^{じゆじ}すれば聖人の如し又世間の作法兼^{かね}て知るによて注^{しる}し置くこと^{これたゞ}是^{べか}違^いう可^{べか}らず現世に云^いをく言^{たが}の違^いはざらんをもて後生^{ごじやう}の疑をなすべからず、日

蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声^{だいおんじやう}を放てよばはりし事これなるべし纔に六十日乃至百五十日に此事起るか是は華報^{けほう}なるべし実果の成ぜん時いかなげか^歎はしからんずらんあるということです。

「日蓮は聖人にあらざれども」とは、御謙遜^{けんそん}です。「説の如く受持すれば」とは、色説^{しきとく}です。大聖人が、身口意^{しんくうい}の三業^{さんごう}で、法華經のままの實踐をなさっているがゆえに「聖人の如し」、すなわち聖人であるということなのです。

「又世間の作法兼て知るによて」の「作法」というのは、理法と訳します。理^{ことわり}の法、道理の法ということです。それは、悪人、正法誹謗の者ばかりがふえてくれば、世の中はどうなっていくか、それをまえもって見ぬいておられるのです。

「注し置くことは是違^{これたがひ}う可^{べか}らず現世に云^いをく言の違はざらんをもて後生^{ごじやう}の疑をなすべからず」

ここで断言なさっているのは、大聖人が、立正安国論でなさった予言が、現世に厳然とあらわれてきたではないか、ということです。なにしろ大聖人が佐渡に御流罪になったので、みんな疑ったのです。疑ったけれども、現実には、大聖人が立正安国論で予言されたとおりになってきた。

この実証をみて、信心を全うするならば、かならず後生に成仏できることも、信じていきなさい。

また、大聖人の門下は、かならず「現世安穩、後生善処^{ごじやうぜんじょ}」になるのだから、大聖人のいったことを疑わないで、素直に信心していきなさい、とのおおせです。

「日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり」

「関東の御一門」ということは、一往は北条幕府ですが、再往は全日本ということです。全日本ということは、依正不二で、全世界ということになります。これは日寛上人の文段に、明瞭に示されています。

日蓮大聖人は、その「棟梁なり」——全世界の棟梁、柱である、との御文です。これは主師親の三徳のうち、主徳をあらわします。「日月なり・亀鏡なり・眼目なり」とは、日蓮大聖人の師徳をあらわしています。

「日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし」

大聖人を流したから、当然、七難が起こっているのです。

たとえば、ここに、ひじょうに人柄のよい、そしてまた聡明な人がくれば、なんとなく雰囲気が変わるものです。きれいなお嫁さんがくれば、まわりの雰囲気が変わります。一人の人間で、そのように変わっていきます。ここにマイクを置けば、多数の人に大反響する、一個の当体でそうなるのです。一人のよい支部長がいれば、支部員がみんな変わる。よい部隊長がいれば部隊が変わる。悪い幹部がいますと、みんなが迷惑をし、なんとなく悪影響がおよんでくるものです。一人の平凡な存在であっても、それだけ作用が大きいわけです。

ケネディが死んだときも、そのケネディはたった一人ですが、アメリカの国民にも、それから自由圏の人々にも、さらに共産圏の人々にも、なんらかの動揺を与え、注目をされました。それらもすべ

て、ただ一人の人間の作用です。

いわんや、日蓮大聖人は、宇宙の本源をぜんぶ悟っていらっしゃる末法の御本仏です。その方を佐渡へ流したり、いじめたりした場合には、宇宙に、大きい天変地天、ならびにその影響によって、国土とか、社会に、なんらかの衝動、結果というものがあらわれないわけがありません。

「去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし」

この自界叛逆難、他国侵逼難のことは、前年の九月十二日、竜口の法難のとき、日蓮大聖人が平左衛門尉に向かつて大音声でいったことである。わずかに六十日に蒙古の使いが来、百五十日で自界叛逆の現証が現れているではないか。

「是は華報なるべし実果の成ぜん時いかなげかはしからんずらん」

日蓮大聖人を迫害した結果、自界叛逆難が起こってきた。しかし、これは華報、まだ軽い報いである。そのつぎの「実果の成ぜん時」、実果とは未来の重い果ということで、ここでは蒙古軍の襲来や国じゅうを巻きこむような内乱を意味しますが、そのときはいったいどうするつもりなのか、といわれているのです。

世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏阿羅漢を殺し血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめ瞿伽利等こ

「日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり」

世間の信心していない人々は、日蓮大聖人がほんとうに智者ならば、どうして「王難」、すなわち竜口の法難や佐渡の流罪にあうのか、などと疑問に思っている。しかし日蓮大聖人は、それらの大難にあわれることは、「兼ての存知なり」、まえまえから知っておられたというのです。

阿闍世王あじやせは父の頻婆沙羅王ひんばしやらを殺し、母をも殺害しようとした。また提婆達多は釈尊を殺害しようとして大石を投げ、釈尊の足の小指を破って血を出したし、多数の阿羅漢を殺しているのである。

「六臣これをほめ瞿伽利等くぎやりこれを悦ぶ」

謗法の人間は、そのような悪逆の行為をほめ、喜ぶものなのである。

日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢あらかんの如し然しかるを流罪し主従共に悦びぬるあはれに無慚むざんなる者なり謗法の法師等ほつしが自ら禍とがの既に顕あらわるるを歎なげきしが新かくなるを一旦いったんは悦ぶなるべし後には彼等が歎なげき日蓮が一門に劣るべからず、例れいせば泰衡やすひらが弟せうとを討うち九郎判官はうがんを討うちて悦よろこしが如し既に一門ほろぼを亡ほろす大鬼の此国に入なるべし法華経に云く「惡鬼入其身あつきにゆうごしん」と是なり

「日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢あらかんの如し」

この御文が親の徳にあたります。さきにあげた主徳と師徳をあわせ、大聖人は、三徳具備の末法の御本仏であることをお示しになっているのです。

その大聖人を島流しにして、主君も家来も、みんな喜んでいるとは、哀れなことだ。また邪宗の法師等も、自分たちの謗法の罪が、大聖人の折伏によってすでに現れているのを嘆いていたが、このように大聖人が島流しにあったのをみて、いったんは喜んでいようであらう。しかし、後には、彼らの嘆きは、今の大聖人門下の嘆きに劣らない、たいへんなものになろう、といわれています。

「例せば泰衡たいへいがせうとを討九郎判官こうらんを討て悦よろこびしが如し既に一門を亡ほろぼす」

藤原泰衡は、奥州の平泉ひらいずみにいた有名な豪族、秀衡ひでひらの子供です。父の秀衡の遺言によって源義経みなもとよしつねを匿かくまっていたが、頼朝の圧力に耐えきれず、義経の味方であった弟の忠衡ただひらを討ち、義経を討ちました。しかしその後、頼朝の討伐をうけて、敗走の途中、家来の河田四郎に殺害されて、一族滅亡してしまつたのです。

邪宗を信じている謗法の徒は、今は大聖人が難にあっているのをみて喜んでいますが、この例のとおり、後にはかならず滅びていくのだということです。

「大鬼の此国に入なるべし法華経に云く『悪鬼入其身あくきにゆうごしん』と是なり」

日蓮大聖人を島流しにして、みな喜んでいるのは、すでに日本中に謗法がはびこっているのである。法華経に「悪鬼入其身」と説かれているのがこれである、とのおおせです。

日蓮大聖人に先業なし

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不輕品に云く「其罪畢已」等云云、不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲せられしも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二帝とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつつめるなるべし

「日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず」

日蓮大聖人が、このように佐渡の国へ流されたのも先業のゆえである、過去世の罪業のゆえである、とのおおせです。

しかし、これは、あくまでも私ども末法の衆生を教化し、一生成仏せしむるために、因果の理法を示してくださったところにほかなりません。日蓮大聖人は久遠元初の自受用報身如来、人法一箇の当体でありますから、先業のあるわけがないと考えるのが道理です。

しかし大聖人も、少年時代、清澄寺にはいられ、道善房のもとで念仏も称えられたと思われま

これらのことは、外用の姿の面においてではありませんが、一つの罪障であるとも述べられております。

「不輕品に云く『其罪畢已』等云云」

ここで大事なことは、皆さんが信心をまっとうしていく過程には、自分の罪業をぜんぶ消していくために、どうしても三障四魔という具体的な現象なり、難がある。しかし、それらに信心で敢然と挑んでいったとき、「其罪畢已」（其の罪畢え已って）、すなわち罪障を消滅できる。そして、絶対的な幸福、永遠の幸福を確立することができるのです。

たとえば、お風呂へは行ってよごれをとるでしょう。そのよごれはきたないですが、洗い去った後は、清潔になり爽快な気分になるでしょう。その道理と同じなのです。

したがって難を恐れてはいけません。堯爾かんじとして、その嵐あらしというか、難というか、一つの現象を乗り越きっていく信心がなければ、一生成仏はかないません。

「不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈のりちややく打擲うちちやくせられしも先業の所感なるべし」

過去において不輕菩薩が、たくさんの謗法の連中に罵詈されたたり、打擲されたのも、ぜんぶ過去世の謗法の所感であるということです。

「何いかに況いや日蓮にんじょう今生こんじょうには貧窮下賤びんぐげせんの者と生れ旃陀羅せんだらが家より出たり」

日蓮大聖人は、貧乏な、賤しい、なんの特権も名誉もない家にお生まれになった。旃陀羅の家、すなわち漁師の家に生まれ、民衆のなかにお生まれあそばされた。これこそ大聖人が、民衆を救済され

る仏さまであるという証拠です。

大聖人は、どこまでも庶民の味方として振る舞っていらっしゃるし、説いていらっしゃるのです。

皆さんが、究明すればするほど、実践すればするほど、大聖人の仏法の民主性がわかってきます。

なにしろ、まだ末法にはいつて、わずか九百年前後です。末法にはいつて一千年目が、西暦二千五十二年になるのです。末法万年^{じんみちうさい}尽未来際にわたる大聖人の仏法です。したがって、現在は土台のなかの土台です。先駆のなかの先駆です。時代が進めば進むほど、科学が進めば進むほど、また、人々の社会観、人生観、生命観などが進めば進むほど、大聖人の仏法の正しさが証明されていくことは、絶対にまちがいありません。

「すこし法華経を信じたる様なれども」——御謙遜^{けんそん}の立場でいわれています。凡夫僧のお姿です。

「身は人身に似て畜身なり」——大聖人の仏法は、どこまでも人間性を根本とした仏法です。虚像^{きやうざう}ではない。形式でもない。きらびやかでもないのです。ほんとうの人間性そのままの本源的な説き方をしているらしいのです。

「魚鳥を混丸^{こんがん}して」とは、魚や鳥を食べて自分の体ができるという意味です。「赤白二滯^{せきびやくたい}とせり」とは、お父さん、お母さんから生まれてきたということなのです。

「其中^{そのなか}に識神^{しきしん}をやどす濁水^{だくすい}に月のうつれるが如し糞囊^{ふんのう}に金^{かね}をつつめるなるべし」

そのなかに識神、すなわち人間としての精神、生命を宿している。それはちょうど、濁った水に月が映っているようなものであるし、糞囊に金を包んでいるようなものであります。

権力を恐れず悠然と前進

心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身に對すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心の余殘なるか五千上慢の眷屬なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄は炎打てば劍となる賢聖は罵詈訾して試みるなるべし、我今度の御勘氣は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三惡を脱れんずるなるべし

「心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず」
ここは大事なところです。皆さんも、これから十年先、二十年先、学会を背負っていくときに、この言葉を忘れないでもらいたい。

「心は法華經を信ずる故に」——末法の法華經、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經、即御本尊を信ずるゆえに「梵天帝釈をも猶恐しと思はず」です。梵天、帝釈とは、生活に約していえば、権力者です。今でいえば、総理大臣や大臣級、大金持ちの人々で、民衆をいつも愚弄したり、正法を護持して

いる者をいつも弾圧しようとし、小バカにしている連中をさすのです。

御本尊を持った者は、そのような輩を断じて恐れてはならない。勇気がなくてはいけないのです。正法を護持する人を弾圧する者に対しては、断固、戦いぬくぞという決心がなければいけない。

「身は畜生の身なり」

身体は、あくまで凡夫の身であるということです。

「色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり」

ということは、日蓮大聖人は皇族として生まれて信心したのでもない。釈尊の場合には王家の生まれですが、大聖人はそういう立場でもない。いちばん貧乏な旃陀羅の家に生まれて、なんの名誉も、財産も、位もないから、いくら法華経が第一といっても、みな侮るであろうという意味です。

「心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ」

心も、そのような貧しい身に対するから月や金にも譬えることができるのである、とおおせです。

「又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや」

今は心に法華経をたもっているとはいっても、だれが、その過去にどんな謗法の罪があるかを知ることができようか。過去をたずねるならば、小乗教に執着して、正法を毀った罪によって、生きながら地獄に堕ちた勝意比丘のような生命をもっているかもしれないということです。

「大天が神にもや」

大天という人は、仏の滅後百年にインドに生まれた人です。父を殺し、母を殺し、さらに阿羅漢を

殺し、三逆罪を犯した身で出家しました。そして、我見で仏法を乱し、後に仏教界分裂の源となった人です。過去をたずねれば、その大天の生命であったかもしれない。

いまでも、そういう人がいるかもしれないから気をつけなければいけません。また、そういう人になつてはいけません。邪宗教は、ぜんぶこの眷属です。勝意比丘の眷属であるし、大天の眷属です。

「不輕輕毀の流類なるか」

不輕とは、威音王仏の滅後、像法の時代に法華經を受持した人です。その不輕菩薩をそしり、千劫のあいだ、阿鼻地獄に墮ちた人々の子孫でもあるのだろうか。

「失心の余残なるか」

失心とは、寿量品に説かれている本心を失った者のことです。すなわち、釈尊が法華經を説いたとき、五百塵点劫の昔の下種を忘れてしまつて、信じようとしなかった者のことです。その失心の者の一人であろうか。

「五千上慢の眷属なるか」

釈尊が方便品を説いていたときに、五千人の増上慢の人々が、釈尊の説法をすべて悟つたと思つて退座しましたが、その五千人の増上慢の者たちの眷属であろうか。

「大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし」

過去に釈尊が、大通智勝仏の第十六番目の王子として法華經を説いたときに、ある人々は信心して仏になり、ある人々は信心したが途中で退転し、後に釈尊によつて救われた。そして残りの第三の人

人は、まったく法華經を信じようとしなかった。その人々が「大通第三」ですが、その流れをくむ者であろうか。

このように、過去をたずねてみるならば、われわれの宿業ははかりがたいのです。

「鉄は炎打てば劍となる」

鉄というのは、熱いうちに打てば打つほど、立派な劍とすることができるとのことです。この鉄とは、いまの皆さん方のことです。

「賢聖は罵詈雑言して試みるなるべし」

賢人、聖人というのは、世間から悪口され、迫害を受けて、初めてその真価がわかるのです。迫害を受けながら、悠然と前進できる人が、ほんとうに偉いのです。

たいていの人は恐がったり、世間体を考えたり、臆病になったりします。そういう人は、根本的には偉くないのです。みえっぱりで、確信も、哲学も、信念もないということになってしまう。個人も団体も、ぜんぶ同じです。ここは大事なところです。

ですから、なにがあっても、それを試練と考えて、喜んで挑んでいくことです。この御書のこの段を、一生涯、どんなことがあっても忘れてはいけません。

「我今度の御勘気は世間の失一分もなし」

大聖人の島流しは、世間の失はなにもない。世間的には、なにも悪いことはしていないというのです。

「偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし」

このように日蓮大聖人が、多くの難をうけられているのは、過去世の重罪をぜんぶ消してしまつて、未来に地獄、餓鬼、畜生の三悪道に墮ちることをまぬかれていくためなのです。

御本尊を中心とし、広宣流布に進んでいけば、罪業はぜんぶ消えてしまいます。皆さんは、若いときから信心しているから、早く消してしまふことができます。ですから皆さんが、ちょうど私と同じ年輩になったときには、さぞかし立派な境涯になっていることでしょう。こんなにも自分は幸せになったか、すごい立場になったか、といえるような人生を遊戯していくことはまちがいありません。それは確信をもってください。

ただし、この世の中は娑婆世界です。使命があればあるほど、いろいろとたいへんなこともあります。だが、たいへんなことがあるということは、より以上福運が積めるという証拠なのです。

正法誹謗の者は在世の外道の末流

般泥洹經に云く「当来の世仮りに袈裟を被て我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此れ

等の方等契經を誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」等云云、

此經文を見ん者自身をはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外

道が弟子なりと仏記し給へり、法然がほつぜん一類大日が一類念仏宗禪宗と号して法華經に捨しやへい閑かん拋たうの四字を副そへて制止を加て權教の彌陀称名計りを取立教外別伝と号して法華經を月をさす指只ただ文字をかぞふるなんと笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来しゆつたせるなるべし、うれへなるかなや涅槃經に仏光明こうみょうを放て地の下一百三十六地獄を照し給に罪人一人もなかるべし法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり但し一闍提人せんだいじんと申て謗法の者計り地獄守もりに留とどめられたりき彼等がうみひろげて今の世の日本國の一切衆生となれるなり

まず「般泥洹經」の文を引かれています。

「当來の世仮りに……誹謗すること有らん」

「當來の世」とは、末法をさしております。末法において、かりに袈裟けさを着て、仏法の修行者のような姿をして、出家學道している者がいるであろう。そして、なまけ者で、最高の仏法を求めようともせず、方等契經ほうとうがいぎきょうを誹謗する者がいるであろうということです。

「方等契經」とは、大乘經のことです。文底から拝するならば、末法の法華經、すなわち南無妙法蓮華經になります。

「當に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」

末法において三大秘法の仏法を誹謗し、日蓮正宗を誹謗する者は、みな今日、すなわち釈尊の時代にさかのぼってみれば、ぜんぶ外道の輩だったのである。釈尊に対して敵対してきた輩が末法に生ま

ここは、禪宗の邪義について述べられています。禪宗では、釈尊の悟りが、經文に書かれたほかに迦葉かじやうに別伝されて、伝承されてきたとします。そして經文は、悟りの月を指さすものにすぎないから、そのような經文を根本とする教えにしたがっていても、なんの役にもたたないとしています。

「六師が末流の仏教の中に出来しゅつたいせるなるべし」

それらの、正法を誹謗する邪宗の輩やふちは、ぜんぶ釈尊在世の時代の六師外道の弟子が末法に生まれて、仏教のなかに現れ、仏教を乱している姿なのである。

「うれへなるかなや涅槃經に仏光明こうみょうを放はなて地の下一百三十六地獄を照し給たまひに罪人一人もなかるべし法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり」

これは、釈尊の仏法の広宣流布の時について、おおせられたところでは。

涅槃經とは、釈尊が死ぬときに、一日一夜にして説いた經典です。

涅槃經で、仏が地獄を照らしたときに罪人は一人もいなかった。それは、法華經の寿量品のときに、みな成仏したからであるとおっしゃっています。

「但し一闍提人せんたいじんと申もうて謗法の者計はかり地獄守もりに留とどめられたりき彼等がうみひろげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり」

ただし、一闍提人、すなわち不信謗法の者だけは、寿量品のときにも成仏できなかった。その人々が生み広げたのが、いま末法の時代の日本国の一切衆生なのである。そういう謗法の人々がだんだんとふえてしまったのです。ですから、御本尊の力によって仏になる以外ないのです。

「今生に念仏者にて」というのは、まえにも述べたとおり、大聖人が幼年時代に出家なされて、数年間、念仏の寺である安房国、清澄寺の道善房のもとですごされたことをいわれているのです。

「未有一人得者」というのは、中国の念仏者である道綽が「安樂集」という書のなかで述べたことばで、法華経では、未だ一人も成仏した者がいないという意味です。

「千中無一」というのは、善導が「往生礼讃」のなかで述べた言葉で、法華経では千人のうち一人として成仏した者がいないということです。これらの言葉を、法然が「選択集」で法華経を誹謗するために引用して使っているのです。

せんじつめてみれば、今、われわれは御本尊を根幹として、これらの邪宗教を折伏していることになる。なぜなら、これまでもっとも仏に弓を引き、もっとも正しい仏法を誹謗し、ないがしろにしてきたのは、今の邪宗教だからです。釈尊の仏法、また大聖人の仏法を、ほんとうにふみにじってきたのです。

それを今、私たちは強折しているのですから、難があるのはあたりまえのことです。

「今誹法の酔さめて見れば酒に酔る者父母を打て悦しが酔さめて後歎しが如し歎けども甲斐なし此罪消がたし」

誹法の酔がさめて、正法を護持してから、過去の自分を振り返ってみると、ちょうど酒に酔って自分のことがわからなくなり、父母を打って悦んでいたものが、酔がさめて自分のしたことに気がついて、たいへんなことをしたと後悔し、嘆いているようなものである。しかし、どんなに嘆いても、父

母を打った罪は消えないのです。

「何に況や過去の謗法の心中にそみけんをや經文を見候へば烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし外道は知らずして自然と云い」

ここも、まえのところも、因果の理法を示されているところです。いっさいの事象は、すべて原因結果の法則です。大聖人の仏法は最高の科学なのです。生命科学なのです。生命の因果を追究した偉大な哲理であります。

一般の自然科学は、物質界の原因結果の法則について、帰納法的に確立したものであって、生命については、なにも解明できえない。外道は因果の理法を知らないから、生命のさまざまな現象をみても自然という。それ以上追究しようとしないのです。

仏法はいっさいを映すことのできる鏡です。その鏡がないから、どこまでいっても悪循環が繰り返されるのです。不幸な世の中です。皆さんも鏡があれば、自分がわかってくるのです。ソクラテスも「汝自身を知れ」といいましたが、鏡がなければ、すなわち仏法の真髓を実践しなければ、汝自身は絶対にわかりません。

よく民主主義の基調は主体性の確立、自己の確立であるなどといいますが、それも、実際はできえないのです。できたつもりであっても、それは錯覚です。末法の仏法の真髓である御本尊を信心する以外にはできません。

私たちは、それを実行しているのです。ひじょうにたいへんな道を通っているようですけれども、

一人ひとりの主体性を確立しつつ、末法万年尽未来際への恒久平和をめざす大事な進軍です。

「今の人は謗法を顕して扶けんとすれば我身に謗法なき由をあなたがちに陳答して法華經の門を閉よと法然が書けるをとかくあらかひなんどす」

今の人、すなわち大聖人御在世当時の人は、大聖人が、その一人ひとりの謗法の罪を明らかに示して、信心につかせて、幸せにしてあげようとする、自分にはそのような謗法はないといいはって信心しようとしなない。そして法然の捨閉閣拋の言葉などをもちだして反対しようとするのです。

これは現代でも、つねにあることです。信仰なんか必要ないとか、罰がでるなんて非科学的だなどといっている。しかし、そういう人間ほど、心のなかでは信仰したいと思っています。御本尊の力がわかっていなのです。

念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあなたがちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に來て云く法然上人は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚とも申す計りなし

「念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあながちにするなり」

念仏者はともかくとしても、法華經を理論的に体系づけた天台、伝教の流れをくむ天台宗の人々までが、念仏の味方となって法華經を誹謗しているのである。

この姿は、ちょうど、今の全日仏と新宗連、既成宗教と新興宗教とが仲間となって、日蓮正宗創価学会を誹謗するのと同じです。

「今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に來て云く」

この文永九年の一月十六日、十七日の両日にわたって、佐渡はもとより越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々から、念仏者などが数百人集まってきました。そして印性房を中心として、塚原の三昧堂の外へ押し寄せて、大聖人に法論をいどんできたのです。

「法然上人は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき」

これは、印性房を中心とする念仏者たちの言葉です。

法然は、法華經を抛よとはいっていない。「選択集」では、ただ念仏を唱える功德を説いているだけである。山僧とは比叡山の僧、寺法師とは園城寺の僧をいいます。この島へ流されてきた天台宗の僧たちもそれを讀んでいるが、これをどう破折されるか、などと確信もなにもないような質問をして

きたのです。

「鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚むざんとも申す計はかりなし」

日蓮大聖人は、たったお一人です。しかも流罪の身です。そこへ数百人もの人数が攻めてきました。が、みんなかるがると打ち負かされてしまった。ある僧などは、その場で数珠じゆすを切って大聖人に帰依したりした。大聖人は、正しく強かったのです。どうか皆さんも、大聖人のように力強く戦っていただくさい。

鎌倉の念仏者等も、大聖人に破折されつくしてしまったのですが、その人々よりも、この佐渡の塚原へ押し寄せてきた念仏、天台、禪宗等の人々のほうが、なお愚かな姿であったということです。

八難がすべて符合

いよいよ日蓮が先生せんしやうこんじやう今生こんじやう先日せんじつの謗法おそろし新かりける者の弟子と成なりけんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚えきやういず、般泥洹はつないおん經に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種あくごうの悪業を作らんには是の諸の罪報・或は輕易きやういせられ或は形状ぎやうじやうしゆりるえ醜陋衣服足らず飲食おんじきそ羶そ財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇あう」等云云、又云く「及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯これ護法の功德力に由よる故なり」等云云、此經文は日蓮が身なくば殆ほとんど仏の妄もう

語となりぬべし、一には或被輕易二には或形状醜陋三には衣服不足四には飲食麤疎五には求財不利六には生貧賤家七には及邪見家八には或遭王難等云云、此八句は只日蓮一人が身に感ぜり。

「いよいよ日蓮が先生今生先日せんしやうこんじやうの謗法おそろし」

先生とは前世、今生とは今世、先日とは大聖人の修行時代のことです。いよいよ大聖人の前世から現在にいたるまでの謗法は恐ろしい。

「かかりける者の弟子と成なりけんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚えず」

このような重罪のある者の弟子となり、また、このような謗法の国に生まれているのだから、このさき、どのようなようになっていくかもまったくわからない。

「般泥洹經はんないおんに云く『善男子過去に無量の諸罪・種種の惡業あくごうを作らんには是の諸の罪報・或は輕易きやういせられ或は形状醜陋衣服足らず飲食麤疎財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇あう』等云云」

ここは般泥洹經に説かれる八種の大難です。過去におかした罪によって受ける報むくいをあげているのです。過去の罪の報いによって人からバカにされたり、容姿が醜みにくかったり、衣食住に事欠いて、經濟面でも恵まれず、貧乏の家、邪宗の家に生まれる等の難を受けるのです。

「又云く『及び余の種種の人間の苦報現世に輕く受くるは斯これ護法の功德力に由る故なり』」

いまあげた八難やその他の苦しみを、正法を護持したことによって軽く受けているという経文です。「護法の功德力に由る故なり」のところは、信心をしている場合をいうのです。

この世は娑婆世界——勘忍の世界ですから、また日本全体が総罰を受けているのですから、だれびとにも苦難はある。しかし、信心している者は、その種々の苦難を軽く受けているのです。法を護っているという功德の力によって、どんなに苦しいことが眼前にでたとしても、それが、本来のものよりはるかに軽いものなのだとこの経文であります。それを確信しなければなりません。

「此経文は日蓮が身なくば殆ど仏の妄語となりぬべし」

王難に遭うなどということは、釈尊の時代にも多少はありました。この八難ということがぜんぶあてはまっている仏さまは、日蓮大聖人だけです。ということは、末法の御本仏としてのお姿を予言してあるこの般泥洹經に、ピッタリ符合しているのは、日蓮大聖人だけであるということです。

したがって、もし大聖人の出現がなかったら、このような実相がなかったならば、仏の金言は虚妄となってしまう、金言とはいえなくなってしまうのです。

つぎに、この八難の一つひとつをあげていらっしゃいます。

「一には或被輕易」

日蓮大聖人は、国じゅうの人々からバカにされ、悪口罵詈された。

「二には或形状醜陋」

大聖人は、形状醜陋ではありません。ほんとうに立派なお姿であったと思いますが、ただこれは貴

族階級のような高い身分ではない、また姿、形が貧しかったという意味だったのでしょう。どんな貴族よりも、大聖人のほうが、ずっとご立派であったことはまちがいありません。

「三には衣服不足」

着るものがなかったのです。

「四には飲食麤疎」

大聖人は、佐渡で、食べる物がなく、雪を食しあがっておられたこともありました。当時は佐渡の国へ流されるということは、死刑に匹敵したのです。

「五には求財不利」

財を求めるに利あらず、と読みます。だが大聖人はお金などは欲しくないので。金もうけのための邪宗の僧とはぜんぜん違います。

「六には生貧賤家」

大聖人の場合は、貧しい漁師の家に生まれました。

「七には及邪見家八には或遭王難」

邪見の家に生まれ、また王難にあう。二度の流罪のみならず、死罪にもおよんだのです。

この八難は、日常生活において、皆さんが、自分自身にあてはめて考えていくべきです。なぜならば、ここは、大聖人が、示同凡夫のお姿で、身口意の三業で經文をお読みになって、われわれの信心のあり方、仏法の修行の決意をお示しになっているところだからです。

ですから、われわれがみな、こういう姿になっていることは、過去をたどってみるならば、謗法の罪なのです。地によって倒れた者は、地によって立つ。謗法によってこういう結果になったのですから、正しい仏法によって信心修行に励めば、ぜんぶ改革できる、そして人間革命ができるということです。

「此八句は只^{ただ}日蓮一人が身に感ぜり」

この八難は、ただ大聖人お一人の身にあてはまることである。かさねて、大聖人が末法の御本仏であることを述べられています。

厳しき因果の理法

高山に登る者は必ず下^{くだ}り我^{われ}人を軽^{かろ}しめば還^{かえつ}て我身^{わがみ}人に輕易^{きようい}せられん形状^{ぎやうじやう}端嚴^{たんごん}をそしれば醜陋^{しゆうる}の報^えいを得^え人の衣服^{えふく}飲食^{おんじき}をうばへば必ず餓鬼^{がき}となる持戒尊貴^{ぢけいそんき}を笑へば貧賤^{ひんせん}の家に生^{しょう}ず正法の家を
そしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民となり王難^{わうなん}に遇^あふ是は常の因果の定^{さだま}れる法なり

ここもまた、因果の理法を述べていらっしゃるところです。

「高山に登る者は必ず下り」

山に登った人は、かならず下りなければならぬ。もし、そのまま帰ってこなかったら遭難です。

「我人^{われひと}を輕^{かろ}しめば還^{かえつ}て我身^{わがみ}人に輕易^{きようい}せられん」

一般的にもよくいわれることですが、人をバカにすれば、因果の理法で、やがては人からバカにされるようになるのです。まして仏法をたもち、広宣流布のために戦っている日蓮正宗創価学会を笑ひ、小バカにしている評論家などがいますが、未来にどれほどの報いがあるかしれません。かならず証拠がでるのです。この確信でいきましよう。

「形状端嚴^{ぎようじやうたんこん}をそしれば醜陋^{しゆうろう}の報^えいを得^え」

「形状端嚴」とは、顔かたちが端正でおごそかなことをいい、世間的には立派な人、人格者などをさします。また日蓮大聖人、即御本尊にも通じます。そしる人は「醜陋の報い」、いやしく、醜くなるという報いをうけるのです。

ですから、女の人は、あんまりお友だちにヤキモチをやかないことが大事ですね。

「人の衣服飲食^{えぶくおんじき}をうばへば必ず餓鬼^{がき}となる」

人のものを盗めば、かならず餓鬼となる。食べられなくなって苦しむ。貧しい最低の生活におちるといふことです。

「持戒尊貴を笑へば貧賤^{ひんせん}の家に生^{しょう}ず」

すなわち、正法の御僧侶を笑えば、貧賤の家に生まれる。また総じては、御本尊を持った者を笑っても、貧賤の家に生まれる。ですから、われわれを笑う者がいたら、ああ、あの人はかわいそうに、

来世は貧乏な家に生まれる、と思えばよいのです。

「正法の家をそしれば邪見の家に生ず」

正法をたもっている家の悪口をいえば、邪見の家、すなわち謗法の家に生まれて、ふしあわせになるのです。

「善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ」

「善戒」とは、御僧侶です。総じては日蓮正宗創価学会です。ですから、信心しているわれわれを笑っても、なにかの罪にとわれたり、牢へはいったりするということです。また広く約せば、税金で苦しむとか、権力でさまざまに圧迫されていかなばならない生活になるともいえると思います。

「是は常の因果の定れる法なり」

これは世間一般の因果の定まった法なのです。

護法の功德力による

日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未来際が間一づつこそ現ずべかりしを日蓮つよく

法華經の敵を責るによて一時に聚り起せるなり譬は民の郷郡などにあるにはいかなる利錢を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起が如し斯れ護法の功德力に由る故なり等は是なり

「日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に」

大聖人が難にあわれるのは、この世間一般の罪業によるのではない。ひとえに、過去に法華經の行者をバカにし、御本尊に対して謗法を犯したゆえである、と。もちろんこれは、さきほども述べたように、大聖人が示同凡夫のお立場で述べられているのです。末法の一般の民衆の立場でおおせになっているのです。

したがって、われわれの不幸な生活の根本原因も、やはり御本尊を誹謗したことにあります。釈尊の法華經に対する謗法、それから釈尊自身を誹謗した等のいろいろの謗法の姿がありますが、日蓮大聖人、また南無妙法蓮華經を誹謗するという罪は、いちばん重いのです。それを頭にいれておきなさい。

「法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり」

法華經が最高唯一の經文であるさまを、月、星、華山、玉をかさねることによってあらわしています。その最高唯一の法華經、すなわち御本尊を、あるいは、立派な教えであるがむずかしくてだれも

それを実践できないといったり、あるいは、第二、第三の教えであると下したりした罪によって、この八種の大難に遭っているのである。

「此八種は尽未来際が間一つつこそ現ずべかりしを日蓮つよく法華經の敵を責るによて一時に聚り起せるなり」

この八種の大難は、尽未来際の長いあいだにわたって、一つずつ現れてくるべきものであったのを、日蓮大聖人は強く法華經の敵を責めることによって、一時に集まり起こされたのです。

これは一生成仏です。南無妙法蓮華經は、過去の謗法の罪をみんな消してしまふ。それを一生成仏というのです。

今世がいちばん大事なのです。今世の実態が来世の実態となるわけです。ですから今世が大事なのです。今世をいいかげんにしておいて、来世にがんばればいいといっても、そうはいきません。やはり今世にきちんと罪業を消滅しておかなくてははいけません。大聖人の仏法はどこまでも現実主義なのです。

「譬^{たとえ}ば民の郷郡などにあるにはいかなる利錢を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起^{きようおこる}が如し」

たとえば、民が地頭の領地のなかにいるあいだは、税金などを滞納^{たいのう}してもひどくは責められないため、年々に延ばすこともできる。しかしそこを出て、他の土地へ移ろうとするときには、一時にぜんぶを払わなければならなくなってしまうようなものである。

「斯れ護法の功德力に由る故なり等は是なり」

日蓮大聖人が、このような大難を受けて成仏なさったということは、護法の功德力によるのです。

不輕菩薩の實踐を

法華經には「諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至國王・大臣・婆羅門・居士に向つて乃至数数擯出せられん」等云云、獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり、父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかねれば不輕の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき、彼輕毀の衆は始は謗せしかども後には信伏随從せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無數劫をや經んずらん三五の塵点をやおくらんずらん

「法華經には『諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至國王・大臣・婆羅門・居士に向つて乃至数数擯出せられん』等云云」

法華經勸持品第十三の文です。三類の強敵について明かされているところです。

「諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる」が俗衆増上慢をあらわし、「国王・大臣・婆羅門・居士に向つて」、そして「数数擯出せられん」が僭聖増上慢です。道門増上慢については、ここでは略されています。

一つひとつの經文がぜんぶ、日蓮大聖人のお振る舞いにあたっているのです。

「獄卒が罪人を責めれば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し」獄卒が罪人を責めなかったならば、いったん地獄へ墮ちた者は、その罪を消して地獄を出ることができない。それと同じように、大聖人御在世當時も、大聖人を迫害した北条幕府がなかったならば、大聖人の過去の重罪も消すことができなかったであろう、といわれているのです。

「日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し」

日蓮大聖人は、過去に種々の迫害をうけて仏になった不輕菩薩のようなものであり、大聖人を迫害する人々は、不輕菩薩をバカにした大衆のようなものである。

「人は替れども因は是なり」

大聖人と不輕菩薩、大聖人を迫害した人々と不輕菩薩を迫害した人々というふうには、人はかわつても、同じ法華經を行ずるといふ因、また法華經の行者を誹謗するといふ因は同じである。

「父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかなれば不輕の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき」

父母を殺す人は異なるけれども、みな同じく無間地獄に墮ちてしまふ。それと同じ道理で、不輕菩薩は二十四文字の法華經を弘めて、迫害を受け、仏になっている。そして日蓮大聖人も、七文字の末法の法華經を弘めて、このような大難にあつていらつしやる。どうして大聖人お一人が仏にならないことがあるであらうか、との大確信を述べられているのです。

「又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき」

「跋陀婆羅」というのは、不輕菩薩を輕毀して、地獄に墮ちたが、再び不輕に会つて救われ、法華經の会座にも出席した大衆のなかの代表者です。大聖人を迫害する人々は、不輕輕毀の跋陀婆羅と同じように、のちには妙法に巡りあつて救われるであらう。ただ千劫も阿鼻地獄で苦しまなければならぬことが、かわいそうに思われる。

「彼輕毀の衆は始は謗ぜしかども後には信伏随從せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無數劫をや経んずらん三五の塵点をやおくらずらん」

不輕をそしつた人々は、たしかに初めはひどい謗法をおかしたけれども、最後には不輕に信伏随從した。そのことによって、謗法の罪は大部分消えて、わずかしが残っていなかった。だが、その少分残っている罪によつても、父母千人を殺したほどの大苦をうけたのである。

ところが大聖人を迫害した人々は、まったく反省する気持ちもなく、ますます謗法の心が強盛であ

る。最後まで信伏随従しないのだから、どれほどの罪があるだろうか。

法華經譬喻品第三に説かれているように、無数劫のあいだ、阿鼻地獄あびじごくにあって苦しまねばならないであろう。もしくは三千塵点劫、五百塵点劫の長きにわたるであろう、とおおせです。

これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮が新かくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢かしこしと思はん僻人ひやくにん等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便ふびんとも申す計りはかなし、修羅しゆらが仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道くきやうどう我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房ごぼうは師匠にておはせども余あまに剛こはし我等はや柔はらかに法華經を弘ひろむべしと云んは螢火ほたるびが日月をわらひ蟻塚ありづかが華山かさんを下し井江せいこうが河海かかいをあなづり烏鵲かきさぎが鸞鳳らんほうをわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華經

文永九年太歲三月二十日
壬申

日蓮弟子檀那等御中

日蓮花押

「これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮がなくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便とも申す計りなし」

こころも大事なところです。皆さんは将来、立派になることはまちがいないのです。日本的、いな世界的な人物として活躍する人もあるでしょう。そのときに、御本尊を忘れたり、信心を忘れれば、この教訓と同じになってしまいます。

「これはさてをきぬ」

謗法の者は別として、こんどは日蓮門下の弟子等に戒めていうということです。

日蓮大聖人がこのような難にあったのをみて、いままで信心していた者が疑いを起こして退転し、それどころか大聖人を批判さえしている者がいるが、その人々は、信心しない人よりもっと長いあいだ地獄へ墮ちるのだ、かわいそうだ、ということです。もっとも罪が深いのです。謗法の人より深いのです。

「修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし」

増上慢の修羅は、仏の悟りは六根、六境、六識の十八界であるが、自分の悟りはそれより一界多い十九界であるといい、外道は、仏の最高の悟りは一仏乗という一つのものしかないが、外道には九十

五種の悟りがあるといっている。そして、その悟りの数が多いから、自分たちのほうがすぐれていると慢じているのです。

同じように、退転していった者たちが、大聖人は師匠ではあるが、折伏などをあまりにも強くやりすぎるのではないか、われわれはやわらかに法華経を弘めていこうといっている。それは、螢の小さな光が明るい太陽や月を笑い、蟻塚が中国のもっとも大きな山の一つの華山を自分より低いといい、井戸や小川が大河や海をあなどり、烏鵲が鳥の王である鸞鳥や鳳凰を笑うようなものである、と大聖人はおおせです。

われわれはどんなことをいわれても、悪口をいう人間はぜんぶ螢火である、われわれは日月の光である、との大確信でいきましよう。

佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし此文を心ざしあらん人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ、世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべの入道いかになりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし、外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がなくては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候べし。

「佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし」

大聖人流罪の佐渡の地には、手紙をおしたためになる紙さえもないのです。また一人ひとりに便りをするのは煩雑ですし、一人でもお手紙をいただかない人があったら、その人は恨みに思うでしよう。ですから日蓮大聖人は、このお手紙を弟子檀那全員に与えられ、皆で見るように述べられているのです。

「心ざしあらん人人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ」

大聖人をほんとうに信じ、師匠と思っている人は、寄りあって、みんなでこのお手紙を拝読しあっていきなさい。そして信心の糧としていきなさい、といわれているのです。

ちやうど皆さんが寄りあって、「佐渡御書」をこのように読みあっているのと同じ姿です。

「世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず」

世間にあっても、大きな難が出来たときは、小さな難などは、なんでもなくなってしまおう。

ここが大事です。自分の小さなことで悩んでいる人がいますが、広宣流布という最高の目的観に立った場合は、自分一個の小さい問題などはいっぺんに吹き飛んでしまうのです。偉大な目的観のない人は、小さい問題を拡大して苦しんでいるのです。信心が大切なゆえんは、ここにあるのです。

「当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん」

この御書の初めに述べられている北条幕府の自界叛逆難の戦で死んだといわれている人々は、そのうわさの真偽のほどはわからないけれども、どれほどか悲しいことであろうか。

「いざはの入道いざは 入部さかべの入道いかなりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし」
この人々は皆、大聖人の弟子です。その人々のことを、このように心配されているのです。こんどの戦いで皆どうなったか、消息を知らせなさい、といわれています。

「外典書の貞観政要じょうがんせいようすべて外典の物語八宗の相伝等此等これらがなくしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候たひべし」

「貞観政要」とは、唐の太宗皇帝が群臣たちと政治について語ったものを編纂へんさんした書物です。その貞観政要や、その他の外道の物語、また俱舎くしゃ、成実じょうじつ、律りつ、法相ほうそう、三論さんろん、華嚴けごん、天台、真言等の大聖人の時代にさかんであった八宗の相伝書などを送るように指示されています。それらも参考にされて、お手紙を書かれていたのです。

(昭和四十一年四月、五月 高等部講義)